4/20/2007

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊　　S.　Ashina

導入１　宗教と民族

１．キリスト教にとっての民族、問いとしての民族

１．宗教類型論から

基盤宗教（cf. 未開宗教、原始宗教）

民族宗教

世界宗教・普遍宗教　cf. 基軸時代以降の宗教（ヤスパース、ヒック）

なだいなだ　『民族という名の宗教
—人をまとめる原理・排除する原理—』岩波新書

Ｌ．マンフォード『人間—過去・現在・未来』（上下）岩波新書

↓

類型から要素へ

要素論から構造論へ

構造論と生成論の統合

２．キリスト教と民族

先行する古代宗教との関わり

古代イスラエル宗教からユダヤ教

→　キリスト教にとってユダヤ的宗教性とは何か、聖書の統一性とは

古代地中海世界の宗教

第三の種族としてのキリスト教

普遍宗教としてのキリスト教の具体的形態における多様性

具体化の原理としての民族

キリスト教徒はコスモポリタンか？

cf.　東アジアのキリスト教における多様性

韓国／中国／日本

３．現代思想とくに日本（論）における問題性

民族・国家

愛国心とは

宮田光雄　『非武装国民抵抗の思想』岩波新書

２．民族論に向けて

民族という現象を整理する上で重要なのは、「自然と文化」「古代と近代」という二つの軸である。まず、「自然と文化」であるが、通常、民族は自然のつながり（血縁と地縁）

の上に存立すると考えられている。もちろん、自然のつながりは民族成立の必要条件であるが、しかし、十分条件ではない。民族は、大家族や部族、部族連合の単純な延長上に成立するものではなく、民族が誕生するには、実体としては自然のつながりが存在しないところに「社会的想像力」――その表現が民族起源神話である――が作用し、民族意識を生じさせる必要がある。社会的想像力の産物であるという点から言えば、「民族」は文化的幻想に他ならない（虚構としての民族）。民族意識は、自然と文化の二つの極によって構成されているからこそ、きわめて強い拘束力を持ちうるのである。

民族現象を規定する第二の軸は、「古代と近代」である。民族とは古代から存在し、また民族の正統性はその古さに訴えることによって主張される。しかし、現代において問題になる民族（民族意識、民族主義）は、18世紀の西欧における国民国家の理念に規定されたものであり、決して古代の民族に直結するものではない。見かけ上はきわめて古いイメージで理解されている「民族的なもの」が、実体は近代における国民国家形成期に創作されてものに過ぎないことが少なくない。この古さと新しさの混在そして混同こそが、民族問題を複雑にしているのである。「民族」について論じる場合、こうした「民族」の構造性に留意しなければならない。

４．民族とは何か―虚構と現実―

cf. 佐和隆光　『虚構と現実―社会科学の「有効性」とは何か』新曜社

・小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会

「複数の国民や民族がいるために国境や民族境界ができるのではない。その逆に、人々を対立的に差異化させる運動が境界を成立させ、その後に、境界内に閉じこめられた雑多な人々が一つの国民あるいは民族として表象され、政治や経済の領域における活動に共同参加することを通して、次第に文化的均一化が進行するのである」(14)

「民族を血縁によって根拠づけることの困難」(39)、「血縁が実際に連続しているかどうかが同一性の維持に無関係であることは、日本の家族制度に明白に現れている」(42)

「民族の同一性」「不断の同一化を通して人間が作り出す虚構の物語である」(51)

「民族は虚構に支えられなければ成立し得ない現象だが、我々の生存を根底から規定している現象でもある」、「虚構とは事実の否定ではない」、「虚構と現実とを二つの対立概念として捉える発想自体が誤まり」(59)

「信念が現実を創出するこの循環現象」(60)

「第一に、虚構は信じられることにより現実の力を生み出すということ、第二に、虚構と現実は不可分に結びつき、虚構に支えられない現実は存在しないということ、そして第三に、虚構が現実として機能するためには、世界を構成する人間自身に対して虚構の仕組みが隠蔽される必要があるということ」(74)

「物語」「記憶」「事実」「共同体の絆」

芦名定道　「第５講　神話と民族」、『宗教学のエッセンス
―宗教・呪術・科学―』北樹出版　1993年

民族＝「血・地」＋α
社会的構想力

・イデオロギーとユートピア

リクール：イデオロギーとユートピアの諸層、社会的構想力、弁証法的な相補性

ティリッヒ：ユートピアと神律　→　ユートピア主義とユートピアの精神

クロッサン：慣習的知恵と転換的知恵

芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代　終末思想の歴史的展開』世界思想社

芦名定道　「ティリッヒのユートピア論」、『ティリッヒ研究』第３号 2001 年、pp.73-82　　現代キリスト教思想研究会 http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/tillich/tillichstudies3/ashina3.pdf

５．国民国家(nation state)と民族

国民国家理念は、近代西欧世界において構築された。

一民族一国家論、民族自決の光と影

cf. アーレント

国民国家の意義あるいは問題性

『全体主義の起源　１，２，３』みすず書房

19 世紀の政治秩序を構成するもの。代議制（政党政治）と国民国家システム。歴史的・文化的な統一性・同一性として表象され意識される。

既存の政治的境界（政治的・法的な意味での市民権の範囲）と歴史的・文化的一体性の境界（民族意識をもった人々の居住地域）とのずれ。

近代の典型とされた西欧社会、とくにイギリス社会の特殊性

３．展望

民族とは、個人と共同体の「生」（生命、生活、伝統の総体）に実体的基盤を与えるという点で共同体の実体原理であり、キリスト教の土着化とは、この共同体の実体的基盤とキリスト教信仰の間に具体的な接点を構築し、民族的伝統との積極的関係を生み出すことに他ならない。その点で、キリスト教信仰と民族への愛とは矛盾しない――もちろん、この実体的基盤の中身が問題であるが――。しかし、実体原理としての民族には、しばしば逸脱・歪みが生じる（罪という問題、あるいはティリッヒの言う疎外、両義性）。自民族中心主義・排他主義はその逸脱・歪みの典型であり、逸脱した実体原理は修正と批判を必要とする。修正・批判原理は実体原理としての民族よりも上位に位置付けられねばならない。キリスト教は実体原理としての民族を、正義あるいは神との関わりという視点から批判し、その逸脱を正すことによってはじめて、真の意味において民族に貢献することが可能になる。内村にとって、間違った近代化を推進しつつある民族主義を批判することは、まさに真の愛国と同一の事柄だったのである。内村は、こうした実体原理と批判原理との統合の原型を、古代イスラエルの預言者に見いだしたのである。

民族との断絶、そして民族への過度の同一化。いずれも、キリスト教の土着化としては避けねばならない事態であって、それに失敗するとき、キリスト教は自己同一性と状況適応性の両面において、危機を迎えることになる。適切な仕方で土着化できないキリスト教

は、逸脱した民族を批判するというその本来の役割を有効に果たすことができない。問題は、批判原理を具体化するに必要な場をいかに生み出すかということである。というのも、批判原理は存在しさえすればいつでも自動的にその効力を発揮できるわけではなく（日本キリスト教の歴史的教訓）、それが有効に機能するためには、それを可能にする場を必要とするからである。

６．民族の両義性と新たな民族概念の構築
　　人間存在の基本構造から「宗教と民族」の関係論を構築する
　　民族のメタファー化の試みへ（4/27、5/11）

＜文献＞

・蓮實重彦・山内昌之編　『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。
・小熊英二　『単一民族神話の起源――＜日本人＞の自画像の系譜』新曜社、1995年。
・小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。